

現代における『ルース』の価値

中村 みどり

はじめに

『ルース』が出版された19世紀半ばの社会では、性に言及することはタブーであったが、ギヤスケルにとって「堕ちた女」という問題は、見て見ぬふりをできない問題であった。ギヤスケルはニュー・ベイリー監獄 (New Bayley prison) に収容されていたパスリー (Pasley) という堕ちた少女がオーストラリアで新たな人生を送れるように尽力した一方、家庭内でも女中が私生児を身ごもるなど、労働者階級の少女たちが誘惑の危険にさらされていることを実感していた¹。そこでギヤスケルは堕ちた女という問題を社会に正視させる事を意図して、世間の非難を覚悟の上で、堕ちた女を主人公とした小説『ルース』を執筆し、堕ちた女の救済を訴えたのだ。この小説は出版と同時にセンセーションを巻き起こした。しかし今日では、ギヤスケルの勇気が称えられる一方で、性的逸脱に対する150年前の罪悪感は理解しがたいものとなっている。そこで本論では、ギヤスケルが「堕ちた女」の救済をいかに訴えているかに焦点をあて、『ルース』の普遍的な魅力を探りたい。

(1)

『ルース』においてギヤスケルはまず、ルースの転落に至る軌跡を丁寧に描き、堕ちた女が生まれる原因は個人の弱さのみにあるのではなく、環境にもあることを示している。

ルースの育った家庭は農業を営む明るく温かい家庭であった。ルースは母の膝で聖句に思いを巡らしたことや、使用人トマス (Thomas) の膝で母の朗読を聞いたことなどを、お針子になってから幸福な思い出として懐かしんでいる。生家でのルースは、膝の上の子供という姿に視覚的に象徴されているように、愛情に包

まれ保護される、孤独とは無縁の存在である。

また、生家での暮らしの様子は、ルースが労働者階級の間人ではあっても、中産階級の同情を引くに値する、リスペクタブルな家庭の出身であることを示している。ルースの母は牧師補の娘であり、ルースが聖句を記憶していることから、母がルースに宗教的な涵養を与えたことが伺われる。ルースの両親を敬愛する使用人トマスは、敬虔な福音主義者として描かれており、ルースの両親も同様であったことを示唆している。居間の調度品が磨き上げられて鏡のように光っていたことも、勤勉で真面目な暮らしを伝えている。

一方、ルースの生家は豊かな自然に囲まれた田舎にあり、自然はルースの一部であった。ルースはお針子になると、仕事部屋の窓に籠の鳥のように身を押し付けて、故郷では真冬でも自然の中に飛び出して自然の美しさに浸ったことを回想する。純朴なルースと自然は一体なのである。

しかし両親の死によりルースの環境は一変する。ルースが12歳のときに母が、15歳のときに父が亡くなり、ルースは州で一番の婦人服店であるメイソン夫人(Mrs. Mason)の店でお針子として年季奉公をすることになる。ルースは独立を目指すのである。

ところが、メイソン夫人の店での生活は生家での暮らしとは対照的であった。まず、家庭的な温かさがみじんもなかった。メイソン夫人は、預かった娘たちに母性的な気遣いや保護を与えることはなかった。夫人はお針子たちも自分と同様に日曜日には親戚の家へディナーに招かれると勝手に想定し、日曜日にはお針子にディナーを用意せず、部屋には火の気もなかった。このため身寄りのないルースは寒さに震えながら、メイドに買ってきてもらっておいしたパンを食べ、孤独に日曜を過ごすよりほかない。しかし夫人は自分に不都合な事実には目をそむけ、お針子たちが一日中何をしていたかについては、一切尋ねないのである。メイソン夫人はまた、お針子の不手際に対して情け容赦のない人で、機嫌の悪いときには、ことさら皮肉や叱責でお針子に当たり散らす。メイソン夫人とお針子たちとの関係は、言わば暴君と奴隷である。

労働も苛酷であった。お針子達は椅子から離れられない毎日と度重なる深夜までの労働を強いられ、その「不自然な生き方」²のために、心身ともに疲弊しているのである。

そして、その仕事場のある通りは、100年前には立派な屋敷の立ち並ぶ絵のように美しい家並みであったのだが、それらの屋敷は細分化され、住宅や店舗の立ち並ぶ味気ない通りとなっている。仕事場の窓から見える自然はこう描かれている。

Poor old larch! The time had been when it had stood in a pleasant lawn, with the tender grass creeping caressingly up to its very trunk; but now the lawn was divided into yards and squalid back premises, and the larch was pent up and girded about with flag-stones. (5)

このような状況は、功利主義と軌を一にした仕事本位の福音主義の弊害について、社会史家の D. H. Cole が次のように指摘した状況を具体的に描き出したものとなっている。

...initiative and enterprise were metamorphosed into greed and overreaching, personal driving force into lust for irresponsible power, abstinence and frugality into meanness, avarice and a will to impose privation upon others, and self-control into a soulless lack of cultural values...³

このような状況の中で唯一の友人が病に倒れて職場を去ると、ルースは天涯孤独となってしまう、兄のような態度で近づく誘惑者ベリンガム (Bellingham) にひかれてゆく。そして、ベリンガムと一緒にいるところをメイスン夫人に見られて即座に解雇を宣告され、独立する道も居場所も失ったとき、ルースはベリンガムに言いくるめられてロンドンへ連れて行かれる。

このように、ギヤスケルはルースの生家と職場の環境を対比して描き、ルースを転落させたのは、利益追求のためには人情を捨て、有用性のためには美も自然も破壊する功利主義であることを示している。そして、詭弁を弄して弱者の苦境を省みない、この資本家本位の理論の非情さを告発し、家族愛が象徴する愛情の絆を社会全体が持つように訴えている。

(2)

墮ちた女の救済を求めるもう一つのアプローチは、ルースが自殺を図ってから生きる力を取り戻し罪を贖うまでの軌跡によって、更生するためには愛と生きがいと希望が必要だということを示すことである。ギヤスケルは救済のための方策を具体的に示し、個人に行動を促すのである。

まずルースは愛によって自殺の危機から救われる。ルースはベリンガムと滞在していたウエールズに置き去りにされ、孤独と絶望の淵に突き落とされると、自殺しようと走り出す。しかし居合わせたベンスン氏 (Mr. Benson) がルースの後を追って転倒し、苦痛の叫び声をあげると、ルースはベンスン氏を助けに戻る。そしてベンスン氏を介抱するうちに、二人の間で交わされた「家庭的な短い会話」(98) のお蔭で狂乱の状態から目覚め、「自分はこの世で必要とされている」(98) と感じて落ち着いてゆく。ルースはベンスン氏の慈悲によって我に帰り、自ら与えた慈悲によって自分の存在意義を感じて自殺を思いとどまったのである。しかし恋人という地上の希望を失ったルースは再び絶望の闇に包まれ、死へといざなわれるのである。ベンスン氏を宿に送り届けたルースが窓から眺める夜空の様子は、次のようにルースの心理を象徴的に描いている。

...and on they [i.e. clouds] went, chasing each other over the silent earth, now black, now silver-white at one transparent edge, now with the moon shining like Hope through their darkest centre, now again with a silver lining; and now, utterly black, they sailed lower in the lift, and disappeared behind the immovable mountains;... (99)

このとき、神さえも拒絶するルースに自殺をあきらめさせたのは、ベンスン氏の「あなたのお母さんの名において...ここにいなさいと命じます」(100) という言葉であった。ルースを死から呼び戻したのは母の愛であったといえよう。

またギヤスケルは、ルースが社会から抹殺される立場にあり、他人であるにもかかわらず、ベンスン氏と宿の女主人ヒューズ夫人 (Mrs. Hughes) が、家族を救おうとする父母のように、打ちひしがれたルースを親身になって世話することを「真実の愛の証」(102)と呼び、第9章を「慈悲は二重の恵み、与える人を恵み、

受ける人を恵む」という『ヴェニスの商人』からの一節でしめくくっている。

ルースが自殺の危機から救われる経緯は、墮ちた女の救済には、「たくさんのキリスト教的な愛」(120)こそが必要であることを示している。

こうしてルースは自殺を思いとどまったものの、希望を見失って生きる力をなくし、生死の境をさまよう状態となる。そしてこのときルースに生きる力を与えたものは、「母親になるという、経験したことのない、新たな甘美な展望」(126)である。ルースは妊娠したことを知ると、すべてを失った自分に新しい命を授けてくれた神に感謝し、罪のない我が子を守り育てるという意義を人生に見出し、回復へ向かう。墮ちた女に対する世間の残酷な仕打ちを避けるために、ベンスン氏の親戚の未亡人としてベンスン家に到着したルースにとって、体内に宿った子供がこの世の希望であることは、次のように象徴的に描かれている。

But over the dark, misty moor a little light shone,— a beacon; and on that she fixed her eyes, and struggled out of her present deep dejection — the little child that was coming to her! (137)

ルースはベンスン家の人々の慈愛に守られて子供を産むと、我が子の幸福のために自己を放棄し、世俗的な価値を棄て、神の愛を希望として神を仰いで生きるようになる。ルースは神の御旨に従って家事と育児に快活に取り組み、子供に教える知識を身につけるために勉強をはじめめる。

ルースが生きる力を取り戻して行く過程は、人に生きる力を与えるのは存在意義と希望であることを示している。ギヤスケルは、墮ちた女に「世の中で役に立つ道を開く」(349)ことによって存在価値を自覚させ、自己救済の希望を与える必要性を説いていると言えよう。

更にルースは不安を静めたいと望んで信仰を深め、「神の掟」(276)に従う決心が、ルースに試練に耐える強さをもたらす。ルースはベリンガムと再会したとき、ベリンガムが差し出す「現世的な利点」(297)や「実際的な幸福」(303)を手に入れるよりも、「神の神聖なる御旨」(301)に従う生き方を貫き、息子レナード(Leonard)を立派なキリスト教徒に育てることを選ぶ。そして過去の罪が露見すると、正道を歩む懸命の努力をする姿を自らレナードに示すことによってレナー

ドを教え導き、社会的追放という試練に耐える。こうしてレナードはルースを敬愛するようになり、神の道へ導かれる。更にルースは無私の看護によって社会から立派な人間として敬愛されるようになり、レナードの私生児という負い目は晴れ、レナードに医師になる道が開ける。そしてルースは自分の命と引き換えにペリンガムの命を救って天に召される。「神が私を罰するために、どれほどの試練、どれほどの悲哀、計り知れない苦しみを与えたもうとも、ただ最後に天国で神の御前に出ることができるものなら、私はひるみません」(285-6) というルースの思いどおり、ルースは臨終の床で、近づいてくる神の光に手を差し伸べて息を引き取るのである。

このようなルースの贖罪の軌跡は、「神の創りたもうたどの人間でも、踏みにじて、何の希望もない惨めな状態にしてはならないというのが神の御旨です」(351) というベンスン氏の言葉を絵解きしている。

ギヤスケルはパスリーがオーストラリアで新しい人生を送れるように尽力したとき、ディケンズに宛てた手紙 Letter62 に “I’m going to see her [i.e.Pasley] today to keep up & nurse her hopes & good resolutions.” と記している⁴。また、ギヤスケルは幼いころ、ナッツフォードのユニテリアン派の教会で愛と希望の教え “a rule of charity and hope” を学んでおり⁵、この教会が小説『ルース』に描かれているベンスン氏の教会のモデルとなっている⁶。これらの事実からも、ギヤスケルが堕ちた女の救済にあたって、希望という要素を重視していることが伺える。

ギヤスケル夫人はルースの心理を見事に描くことによって、人を精神的に支えるものは愛、生きがい、希望であることを目に見える形で示し、社会を構成する個人に向けて、堕ちた女の救済のために行動を起こすように求めている。また、ルースの挫折、絶望、強烈な母性、そして抑圧されたエロスは、現代においても読者の心を揺り動かすのである。

(3)

堕ちた女の救済を訴える第三のアプローチは、ベンスン氏と対立する裕福な実業家ブラッドショー氏 (Mr.Bradshaw) の独善を通して社会規範の非人間性を際立たせ、堕ちた女の社会的追放は悪しき因習であることを示すことである。

ブラッドショー氏の人柄は、礼拝で賛美歌を歌う姿に次のように巧みに描かれている。

His [i.e. Mr. Bradshaw's] powerful voice was ... very much out of tune; but as he had no ear, and no diffidence, it pleased him very much to hear the fine loud sound. He was a tall, large-boned, iron man; stern, powerful, and authoritative in appearance; dressed in clothes of the finest broad-cloth, and scrupulously ill-made, as if to show that he was indifferent to all outward things. (153)

ブラッドショー氏は独善と偽善に陥っていながら、自信過剰でそのことに気づいていないのである。

ブラッドショー氏が信奉する理論は、こう描かれている。

He [i.e. Mr. Bradshaw] was richer and more prosperous than ever; — a keen, far-seeing man of business, with an undisguised contempt for all who failed in the success which he had achieved. But it was not alone those who were less fortunate in obtaining wealth than himself that he visited with severity of judgement; every moral error or delinquency came under his unsparing comment. ... If another's son turned out wild or bad, Mr. Bradshaw had little sympathy; it might have been prevented by a stricter rule, or more religious life at home;... (210-11)

ブラッドショー氏の理論は因果応報という強者の理論であり、自己責任原理に基づく自由放任主義（レッセ・フェール）の時代精神でもある。

家庭でもブラッドショー氏は独裁者である。ブラッドショー家は愛情の絆というより力による支配で束ねられている。そしてブラッドショー氏の厳格で独裁的な支配の悪影響は子供たちに及ぶ。ブラッドショー氏は子供たちに町で最高の道徳上、宗教上の躰を施していると自画自賛しているのだが、鞭で打つばかりで愛を伝えない躰は、自分の所持品としての世間体のよさを子供に求めているにすぎ

ない。ブラッドショー氏の妻は夫のいないところでは不満をつぶやき、夫の前では口をつぐんで子供たちに父親に一番気に入られる態度や行動をとらせる。こうして育てられたブラッドショー氏の息子リチャード (Richard) は裏表のある人間になってしまう。また、娘のジェマイマ (Jemima) は父親の愛を感じられずに反発し、「私はお行儀よくしなくちゃならないんだ。それが正しいことだからではなくて、ファーカーさんの前でいいところを見せるために」(223) と憤る。

これとは対照的にベンスン氏はルースの息子レナードを神の御心を見つめて生きるように教育する。また、ベンスン氏はレナードが嘘をつくのを止めさせようと、レナードを鞭打とうとすることがあるが、鞭で打たずとも、ベンスン氏の思いつめた態度と口調から、レナードはベンスン氏が愛ゆえに鞭打とうとしたことを感じ、鞭で打たれたよりも従順な気持ちになり、嘘をつかなくなる。ギヤスケルは健全な精神を養うには、厳しさばかりでなく愛が、世間の目よりも神の目を意識することが必要であることを示している。これは堕ちた女を更生させる上でギヤスケルが求めていることでもある。

ブラッドショー氏の厳しさはベンスン氏の慈愛とも対照をなしている。ブラッドショー氏は事業においても感情を持ちこむことを認めず、「正義は不動であり、融通を利かすわけにはゆかない」(240) と主張する。ブラッドショー氏の娘たちの家庭教師となっていたルースの過去が知れると、ベンスン氏は自己救済の機会を与えるべきだと訴えるが、ブラッドショー氏はまんまと騙され町中で後ろ指をさされるという世間体の悪さに憤慨するばかりで、「实际的な世間の知恵」(351)こそ絶対に正しいという持論を曲げることはない。

ブラッドショー氏の無慈悲でかたくなな心を変えるのは、息子リチャードが起こした横領事件と息子が巻き込まれた馬車の事故である。リチャードがベンスン氏の株券を密かに売却していたことが発覚し、ブラッドショー氏は親としての息子への愛情と、慈悲を許さぬ正義との間で苦悩することになる。そしてリチャードが馬車の事故に合うと、息子とは縁を切ったと公言していたにもかかわらず、息子を案じるあまり気を失い、息子が生きていと知ると、神に感謝の祈りを捧げる。これを機に、ついにブラッドショー氏は言行一致を守るという頑迷にすぎない信念を撤回し、二度と足を踏み入れないと宣言したベンスン氏の教会へ戻る。そしてルースが隔離病棟の婦長として熱病の恐怖を静めると、ブラッドショー氏

はルースがブラッドショー家の別荘で休養できるように計らい、ルースが亡くなると、ルースに対する敬意を表すために墓石を建てることにする。墓地へ出たブラッドショー氏は、ルースの墓所で泣き伏していたレナードに「人間らしい同情」(458)を求めるようなまなざしを向けられると、優しく応えてレナードを牧師館まで送り、ベンスン氏と和解する。このときのブラッドショー氏の様子はこう描かれ、物語を結んでいる。

...for a moment, he could not speak to his old friend, for the sympathy which choked up his voice, and filled his eyes with tears. (458)

ブラッドショー氏は自分が信奉していた正義の非人間性と、自らの独善を知り、人間らしい思いやりを持つに至ったのである。

ギヤスケルは作品の冒頭で因習について次のように述べている。

The daily life into which people are born, and into which they are absorbed before they are well aware, forms chains which only one in a hundred has moral strength to despise, and to break when the right time comes—when an inward necessity for independent individual action arises, which is superior to all outward conventionalities. (2)

ギヤスケルはブラッドショー氏の変化によって、読者が独善の過ちを知り、勇気を持って因習を打破するように促しているのである。

一方、ブラッドショー氏が息子の事件をきっかけに独善を改めて教会に戻り、ルースに敬意を表す過程は、社会がルースを看護の実績によって徐々に受け入れ、疫病の発生という事件をきっかけに、因習を超えてルースに敬意と感謝を捧げるようになる過程と同時進行している。ギヤスケルは、ブラッドショー氏個人とルースとの関係の変化を、社会一般とルースとの関係の変化に重ね合わせることによって、因習の独善性と頑迷さを顕在化させ、堕ちた女を追放するという世間の掟の正当性を問いいただしている。

(結び)

以上のように、ギaskellは墮ちた女に更生の機会を与えるよう訴えるために、墮ちた女に対する世間の思い込みが誤りであることを示し、読者の同情心に訴えると同時に、墮ちた女の問題を環境、心理、因習という三つの側面からとらえ、人の罪は個人の資質ばかりでなく環境にも原因があること、人には愛と希望と生きがいが必要であること、独善の過ちと因習の呪縛を指摘して、読者の内省を促している。ギaskellは墮ちた女の問題を社会と心理の両面から探求することによって、すべての人間が愛情の絆で結ばれて共生する社会の実現を求めているのである。

今日では同棲やシングルペアレントが当たり前になり、墮ちた女の問題はもはや問題ではなくなっているが、社会改良を目指したギaskellのメッセージは、青少年の犯罪や自殺者の増加、グローバリゼーションや原理主義が問題となっている、今の時代においても通用する普遍的価値を持っていると言えよう。

注

* 本稿は日本ギaskell協会第14回大会において口頭発表した原稿に加筆修正を施したものである。

1. Shirley Foster, *Elizabeth Gaskell: A Literary Life* (Hampshire: Palgrave Macmillan, 2002), p.101.
2. Elizabeth Gaskell, *Ruth* (Oxford: Oxford UP, 1985), p.10. 以下、本作品からの引用は括弧内にページ数のみを記す。邦訳は巽豊彦訳『ルース』(大阪教育図書, 2001年)より借用したところがある。
3. Richard D. Altick, *Victorian People and Ideas* (N.Y.: Norton, 1973), p.172.
4. John A. V. Chapple and Arther Pollard, eds., *The letters of Mrs. Gaskell*, (Manchester UP, 1966), p.100.
5. Winifred Gérin, *Elizabeth Gaskell: A Biography* (Oxford: Oxford UP, 1976), p.14.
6. *Ibid.*, p.13.

参考文献

Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* (London: Faber and Faber, 1993)